

## (29) ニンジン

### 1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

12～3月どり												
月	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
栽培暦	○--○											
黒葉枯病												
キアゲハ												
○は種												
□は収穫												

### 2 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
白絹病 ( <i>Sclerotium</i> )	①排水を良好にする。 ②酸性土壌では消石灰を施用する。 ③発病株は見つけ次第除去する。 ④収穫残さは集めて適切に処分する。菌核を形成している場合は、地表の土壌とともに取り除き、土中深く埋める。 <b>【参考事項】</b> 高温時に発生しやすい。 酸性土壌で発生しやすい。 ニンジン以外にも多くの作物に寄生する。 菌核は土壌中で5～6年生存する。	①土壌消毒を行う（土壌病害虫の防除法の項参照）。 (例) ダゾメット粉粒剤（ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤）
根腐病 ( <i>Rhizoctonia</i> )	①連作を避ける。特に前年多発したほ場では連作しない。 ②常発地では3年以上の輪作を行う。ただし、ゴボウ、ジャガイモ、ヤマノイモ、イチゴ、レタス、ホウレンソウなどは輪作作物から除外した方がよい。 ③低湿地での作付けは避け、ほ場の排水を良好にする。 ④発病株を除去する。 ⑤収穫が遅れると被害が増大するので、適期に収穫する。特に夏どりの作型では注意する。 <b>【参考事項】</b> 春播き夏どりの作型に発生が多い。	①全面土壌混和する。 (例) ダゾメット粉粒剤（ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤） トルクロホスメチル粉剤（リゾレックス粉剤）
黒葉枯病 ( <i>Alternaria</i> )	①連作を避け、他作物との3年以上の輪作をする。 ②無病種子を用いる。 ③低湿地での作付けを避け、ほ場の排水を良好にする。 ④肥切れさせない。 ⑤収穫後に茎葉を集めて処分する。	①種子消毒をする（野菜種子の消毒の項参照）。 (例) イプロジオン水和剤（ロブラール水和剤） イミノクタジナルベシル酸塩水和剤（ベルコート水和剤） TPN水和剤（ダコニール1000） ②発病初期から農薬を散布する。 (例) イミノクタジナルベシル酸塩水和剤（ベルコート水和剤） 銅水和剤（Zボルドー、ICボルドー66D、コサイド3000） ピリベンカルブ水和剤（ファンタジスタ顆粒水和剤） ペンチオピラド水和剤（アフエットフロアブル） ボスカリド水和剤（カンタスドライフロアブル） ポリオキシシン水和剤（ポリオキシシンAL水和剤） 有機銅水和剤（キノンドーフロアブル） TPN水和剤（ダコニール1000） <b>【参考事項】</b> 高温時に多発し、発芽不良の原因となる。 病原菌は被害植物に付着して長く生存し、また、種子にも付着して種子伝染する。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
キアゲハ	①幼虫を見つけたら捕殺する。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) アセタミプリド水溶剤 (モスピラン顆粒水溶剤) クロルフェナビル水和剤 (コテツフロアブル) シアントラニリプロール水和剤 (ベネビアOD) マラソン乳剤 (マラソン乳剤、マラソン乳剤50)
	【参考事項】 5月、7月及び秋口に発生が多い。セルリー、パセリも食害する。	
センチュウ類 (ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ)	①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。 ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタラリア スペクタビリス、マリーゴールドなどが有効。 ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールド、ルドベキアなどが有効。 ②太陽熱消毒を行う (土壌病害虫の防除法の項参照)。 ③有機物を施用する。	①は種前に土壌くん蒸する。 (例) クロルピクリンくん蒸剤 (クロールピクリンなど) D-D剤 (D-D、DC油剤、テロン) ②は種前に粒剤を土壌混和する。 (例) イミシアホス粒剤 (ネマキック粒剤) オキサミル粒剤 (バイデートL粒剤、バイデートMK) フルオピラム粒剤 (ネマクリーン粒剤、ピーラム粒剤) ホスチアゼート粒剤 (ネマトリンエース粒剤)
	【参考事項】 ニンジンではネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウによる被害が大きい。ニンジンのキタネグサレセンチュウ寄生による被害として、長根型品種では根の先端が切れたような寸詰まり奇形や先端の細根の叢生が、短根型品種では表皮に微少な縦の裂開や、その腐敗した黒変斑が認められる。 対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。 有機物を施用すると、土壌中の生物相が豊かになり、センチュウ類の天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。	